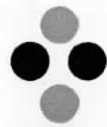
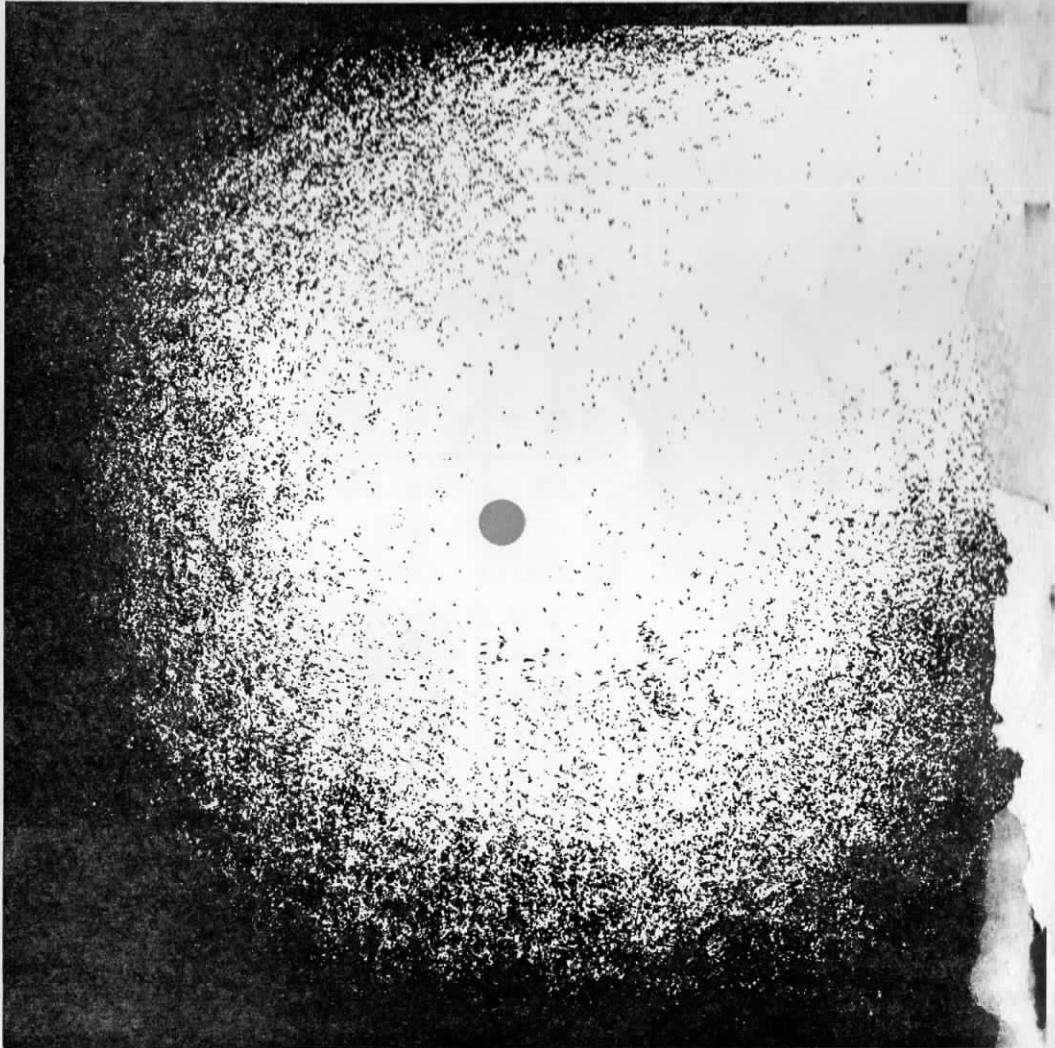


71/5
黒の手帖
11



定価 200円

人間における遊戯と労働 (2)	大沢正道	1
カテキズムへの回帰	内村剛介	15
文学のアナ・ボル論争 (3)	秋山清	21
土着の原理	草階俊雄	32
ブルードンと現代 (3)	長谷川進	34
杜鵑の声	宋世何	44
スペイン革命に おけるCNT (10)	J・ペイラツ 今村五月訳	59
黒の手帖総目次 (1~10号)		79
編集後記		80

表紙 高木 昭

人間における遊戯と労働 (2)

大沢正道

第一章 労働の存存論

1 労働の四つの指標

そもそも人間を労働に向かわせるものはなにか。働くということ
は、いったい、どういうことであるのか、この一見、分かりきった
ことのようにみえる問を追求することからはじめよう。
なぜ人間は働くのか。

現在、ほとんどすべての男女は、中学なり、高校なり、大学な
り、一定の修業期間を終えると、それがまったく当り前のことであ
るかのように、なんらかの形で働きます。この場合、働くというこ
との意味は、彼や彼女の労働力を商品として売りに出す、つまり、
一定時間の労働と引き換えに、一定額の報酬を受け取る、というこ
とである。一定時間労働しなければ、だれも報酬を受けることはで
きず、報酬を受け取らなくては、彼や彼女の生存と生活、さらに彼

や彼女に家族がある場合には、その家族の生存と生活に必要なさま
ざまな物資、その日その日の食物や衣類や住居をはじめとして、光
熱費、交通費、交際費、教育費、遊興費等々、一切合財を、これっ
ぱっちも手に入れることができない。

労働の報酬として受け取る金を払わずに、これらのものを手に入
れるには、方法は二つしかない。一つは、贈与——つまり一種の無
償給付である。のちにみるように、贈与は、未開社会においては重
要な経済原則であったようだが、文明社会にあっては、経済外の、
社交儀礼に属する行為か、ないしはいわゆる慈善行為に貶められて
いる。しかし、自由な、したがって人間的な社会が、もしふたたび
この地球上を覆うことがあるとすれば、その社会では贈与が重要な
経済原則となるであろうし、そうでなければ、自由で、人間的な社
会は確立されることがないだろう、と予見される。だが、この問題
は、当面の論議に直接関係ないから、別の機会に追求することにし
よう。

もう一つの方法は、盗みである。盗みは、いわばもたざる者によ

る一方の被贈与行為といえようが、普通の贈与と異なる点は、社会的な報復——懲罰が、その反対給付として随伴することである。

もし贈与も受けず、盗みも行わず、しかも労働もしなければ、彼や彼女とその家族は、おそらくその瞬間から、食うに食なく、住むに家なく、着るに着物なし、という状態に追い込まれざるをえない。彼や彼女とその家族の生存は脅かされ、生活は破壊される。失業が、とくに家族もちの人々にとって怖れられるのは、このゆえである。現在の文明社会は、ごく大雑把に言って、そのような仕組みになっている。

だが、そのような仕組み、つまり構造をもっているのは、現在の文明社会のなかで、資本主義社会と呼ばれている社会だけであろうか。資本主義社会を超えた、あるいは超えたと称しているいわゆる「社会主義社会」で、「働く」ということは、どういうこととされているだろうか。

「働かざるものは食うべからず」というよく知られた命題がある。いわゆる「社会主義社会」の経済原則である。また、「能力に応じて働き、労働に応じて分配する」あるいは「ひとしい量の労働にはひとしい量の生産物を」——これらもまた、マルクスによれば、共産主義社会への前段階である社会主義社会の経済原則である。

なるほどマルクスは、『ゴータ綱領批判』で、共産主義社会における労働について、鋭い洞察を示している。

「……共産主義社会の高い段階で、個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともにまた精神労働と肉体労働の対立が消滅したのち、労働が生きるための手段であるだけでなく、それ自体第一の生活欲求となつたのち、個人の全面的発展にもな

って生産力も増大し、協同的富のすべての源泉がいつそうゆたかにわきでるようになったのち——そのときはじめて、ブルジョアの権利の狭い世界を完全にふみこえることができ、社会はその旗にこう書くことができる、——各人はその能力に応じて、各人はその欲望に応じて！」（傍点筆者）

ここでとくに傍点をつけた部分は、肝心である。なぜならここに、労働のもつべき新しい質が示唆されており、なにかの手段としての労働でなく、労働それ自体が問われているからである。けれども、ここに示唆された労働の新しい質の問題は、生産力と生産関係というマルクスの史的唯物論の枠組みのなかに埋没させられ、遠い未来の目標に押し上げられてしまっている。

マルクスにおいては、社会主義社会においては、労働はまだ、「生きるための手段」にとどまっている。労働が「生きるための手段であるだけでなく、それ自体第一の生活欲求」となるためには、一つの飛躍が必要であり、この飛躍を可能にするものが生産力の発展である。だが、生産力をたかめるものは、「生きるための手段」としての労働の量的な増強以外にはありえない。「生きるための手段」としての労働の増強による、「それ自体第一の生活欲求」である労働への転化という論理は、レーニンによって定式化された「量の質への転化」という弁証法の原則によって説明されようが、それは、おなじ弁証法の原則を適用した有名なスターリンの国家論——国家権力を最大限に拡充強化することをつうじて、国家権力の廃止に到達するという、あの壮絶な詭弁の同類といわざるをえない。そのことは、ソ連邦の歴史的な発展経過が見事に実証している。

マルクスにより示唆された労働における二つの型——「生きるた

め的手段」としての労働と、「それ自体第一の生活欲求」である労働という区別は、後章で述べるように、べつにマルクスの独創ではなく、おそらくシャルル・フーリエにはじまる思想とおもわれ、社会主義のいわば傍流に属する系統のなかで、理論的に展開されており、マルクス主義においては、ほとんど注目されず、もっぱら前者、すなわち「生きるための手段」としての労働に立脚した議論が展開されている。これは、すでに述べたとおり、この二つの基本型を相互に関連させて考察せず、生産力の発展という直線コースでつなごうとする過剰な歴史主義の結果であろう。

現在のいわゆる「社会主義社会」が、社会主義の名に値いするかどうか、議論のあるところだが、かりに百歩譲って「社会主義社会」であるとしても、そこでの労働が、生存と生活に必要な報酬を受け取るために行なわれていることは、以上の記述からも明らかである。一定時間の労働に対する報酬——その報酬による生存と生活に要する物資の購入、貫徹されているのは、この基本構造である。資本主義社会と「社会主義社会」で変化したのは、労働と報酬との間の函数であり、また報酬と物資の購入との間の函数である。

それゆえ、この基本構造からいえば、なぜ人間は働くのか、という当初の問に対して、人間はその生存と生活を維持するために働く、働かざるをえなくされている、という答えがえられてくる。この答えは、資本主義社会といわれる「社会主義社会」を含む、文明社会にあつては、社会通念としては妥当であろう。社会の構造がそのようなものとして仕組まれているのだから、ごくつづめていえば、「働くのは食うためだ」という社会通念が形成されるのは、ごく自然である。

フランスのテクノクラートの代表的なイデオロギーの一人、ジャン・フラスティエは、『なんのために働くか』（一九五九年 寿里茂訳 文庫クセジュ）という大変魅力的な標題の本を書いている。しかし、魅力的なのは標題だけであつて、内容はしごく通俗的である。通俗的であるのは、彼の労働の概念がさき述べてた社会通念にべつたりだからである。

フラスティエは、『なんのために皆さんは働くのですか』という質問に対して、フランス人の九五%までが、『金を稼ぐために』と答えている」と述べ、「この答はうそではないが、皮相的である。なぜならこの答は、労働から生ずる結果の一つ、俸給あるいは利益を生みだすものを述べているにすぎないからである」と、コメントしている。

彼によれば、「空気中の酸素だけが、労働なしに得られる唯一の自然の産物」であり、それ以外のすべては、なんらかの形で人間の手が加えられてはじめて、人間の欲求を満たすに足るものとなったのである。この人間による自然の加工、それが労働の本質であり、したがって、人間が働くのは、人間の欲求を満たすに足るものを作りだすため、つまり、「生産するため」だと、フラスティエは結論する。

これは、生産する主体である人間の労働そのものを不問に付し、生産された物——財に対象をしばって精細な理論を展開したこれまでのすべての経済学のレベルでの議論である。フラスティエは、「労働なしに得られる唯一の自然の産物」は、「空気中の酸素だけ」と述べているが、この最後に残った空気さえ、「きれいな空気」と銘打って、罐詰に詰められ、商品化されている。このおそるべき自然破壊を、イデオロギー的に、理論的に支持し、推進してきたのが、

既往の経済学であることに、この才気喚発な未来学者はまったく気づいていないらしい。

「人間が働くのは生産するためである」、よろしい、しかし、なぜ人間は、生産しなくてはならないのか。それに対するフーラスティエの答えは、「人間の激しい欲求を充足させるため」となっている。だがこの答えは、フーラスティエが「皮相的」と評した九五%のフランス人の答え「金を稼ぐため」と五十歩百歩である。なぜならすでに述べたように、一切合財が商品化されている文明社会にあっては、欲求を充足させるためには、金を手に入れなくてはならず、現実にはそれは等号で結びつけられるフレーズだからである。これまでの労働をめぐる論議の大半は、この通念に足をすくわれ、労働それ自体を問うことができず、労働の成果である財の分析に向かうか、さもなければ、労働の技術的、社会学的側面にライトをあてるにとどまったのである。

けれども、「欲求を充足させるために働く」というのが、はたして人間の労働の本質といえるだろうか。たしかに現実には、われわれは働いて金を稼がなくては、その日から路頭に迷い、飢え死してしまふ。だがそれは、社会がそのように仕組まれているからであって、そこで営まれている労働の実態を、そのまま労働の本質とみなすことは、それを「皮相的」の謗りを免れまい。

前号の序論で引用したのだが、マルクスは、『経済学』哲学手稿」のなかで、次のように書いている。

「飢え」は自然の欲求である。それは、みずからを満足させ、しずめるために、自己の外部に存する自然を、自己の外部に存する対象を、欲しかつともとめる。」

をえないのである。

それゆえ、人間を生物の一員としてとらえ、最近の神経生理学の発達的成果の上に立って、「人間とは何か」という問題について、哲学者や形而上学者の相対立した思想の間を動揺するのではなく、その客観的基礎づけ」を提供しようと試みているフランスの生理学者ポール・シヨシャルによりつつ、「生命」と「飢え」との関連を迫っていくことにしよう。

シヨシャルは、『人間の生物学』（一九五七年）で、人間の生命には、細胞の生命、個体の生命、理性の生命の三つの段階があるとして、次のように述べている。

「高等な生物にはすべて認められることであるが、人間も、何百億という数知れない、生きている物質からできた単位である細胞の統合的な連合によって構成され、さらにこれらの細胞は異なる機能を受持った種々な群に分化している（組織）。人間の生命はすべての生物の生命と同様に、われわれの細胞に生きている限り備わっている機能や特性の総体、つまり一定の存在様式であって、細胞の生命がなければ個体の生命は存在しないし、とくに大脳の神経細胞が生きていなければ理性は生れない。」（八杉竜一、孝三訳による。以下同じ）

この生きている物質は、生命のない物質、つまり無機物と同じ元素、炭素、水素、酸素、窒素、燐を主体として、そのほか硫黄、カリウム、ナトリウム、カルシウム、マグネシウム、鉄、銅などの元素から成っている。生命のない物質と生きている物質を区別する指標は、前者が原子や分子に分解されるのに対して、後者は「明瞭な小さい塊である細胞」の集まりから成っているところにある。同じ

マルクスはこの「自然の欲求」である「飢え」に、労働の動機を求めている。そのかぎりでは、彼もまた、資本主義社会の通念に足を取られていた、といえようが、はたして「飢え」が労働の動機になりうるか、どうか、それについて検討を進めてみよう。

マルクスは、「飢え」は自然の欲求である」と大胆に断定している。しかし、すこし揚足取り染みるが、たとえば、自然の一部を成す岩石や土壌に「飢え」がみられるだろうか。あるいはまた、海水や空気はどうだろうか。これらの無機物に「飢え」がないことは明らかである。「飢え」がみられるのは、植物や動物、そして動物の一門である人間のような有機物に限られる。「飢え」が無機物にみられず、有機物にだけみられるということは、無機物と有機物の質を区別する「生命」なしには「飢え」は存在しえぬこと、つまり、「生命」をもった物質にのみ「飢え」がみられることを示している。そして、「生命」は「飢え」なしに存在しうるかもしれないが、「飢え」は生命なしには絶対に存在しえぬことからして、「生命」は「飢え」をも包括する、基礎的な、根源的な概念であるということができよう。

「生命」というと、文科系の素養をもつ読者の多くは、哲学的な、あるいは文学的な生命概念を連想するであろう。しかし、「生命」はもともと、ある種の物質——有機物に特徴的な化学エネルギー現象であり、超自然的な、あるいは神秘主義的な不可知の存在ではない。そして、この物質的な実在としての「生命」の認識を抜きにして「生命」を語ることは、人間ないしはもっと広く生物一般の存在を抜きにして、それとのつながりのないところで、「生命」を語っているようなものであり、それは結局、観念の虚妄に陥らざる

ような元素から形成されているにもかかわらず、なぜ一方は原子や分子となり、他方は細胞になるのか、という疑問について、シヨシャルは、次のように答えている。

「普通の原子が有機の分子として集まってつくる、恐ろしいほど複雑なこの化学的構造は、だんだん人工的合成に近づきつつある。このことは、構造の正確な再生産が機能すなわち生命を生むという、確からしく思われる仮説の下で、ウィルスの領域においてはすでに実現の道にのせられ、生きている物質を合成するという遠い未来の希望を予測させる。」

つまり、彼によれば、生きている物質と生命のない物質とは、ア・プリオリに異質なものではなく、それを構成する分子の化学的、物理的構造と、その複雑な構造を維持する一定の「環境条件（温度、湿度、圧、……）」の相違によって違ってきたにすぎないのである。もちろん、この複雑な化学的、物理的構造とそれを維持する環境条件の詳細については、まだ十分に究められていないのが現状であるが、生命がある種の分子の化学的、物理的構造より成っていることは、すでにオパーリンらも指摘しているところであり、ほぼ確かといつてよいだろう。

このようにして形成された生きた物質の特性は、その形成の過程からも推察されるように、変化もしくは流動をその特徴としている。「生命の働きは、一定の固化と液化との間を動揺する粘稠度の絶えまない変化に伴われ、液化の状態は興奮や活動を伴い、固化は静止と一致する。この繊細なコロイド状態は死とともに、消失して、細胞の物質の凝固が起る。」

と、シヨシャルは書いている。生命がコロイド状だという記述

は、古くから生命の文学的な表現として使われている「どろどろの」とか「ねばねばした」とか「渦巻く」等々と一致している。この一致は、決して偶然ではない。文学者の直観が生命の本質をとらえたのであろう。

生きた物質のいま一つの特性は、それがたえず外界との間で原子および単純な分子の交換を行なっていることである。「生きている物質の中で安定なものは、構造と、形と、機能だけであって、その構成物は絶えず更新されている。われわれは自分自身の原子というものを持たず、絶えず外界との間に交換が行われている」のである。この細胞の外界との交換活動が、代謝と呼ばれるものだ。

「生命に特有なもの、そして生きている物質の複雑な構造に關係しているものは、代謝の化学でもエネルギー論でもなく、この代謝そのものの存在である。すなわち、一つの反応が他のものから流れ出てくる、調和したこの反応の連鎖であり、それが細胞の存在を可能にしている。そこには、複雑な構造の中の自家調整作用がはたらいている。」

と、シヨシャルは書いています。

代謝は、異化作用と同化作用の二つに大別される。異化作用とは、「エネルギーを放出する破壊的な代謝」つまり、外界の物質を摂取し、それを分解して、自らの構造の維持に必要なエネルギーとする代謝である。呼吸作用や消化作用はその代表例といえよう。

生きている細胞はまた、周囲の外界に鋭敏に反応する感受性をそなえている。外界からの刺激に感受性が反応する特性は興奮性と呼ばれ、細胞を活動させる。これも、異化作用としての代謝の一つである。

これらの交換活動全体をコントロールしているのが大脳である。これらの交換活動全体をコントロールしているのが大脳である。

シヨシャルは、人類の出現を決定づける指標として、直立し、頭を頸の上にすえられるようになったために発達した大きな頭蓋と、その頭蓋のなかで発達した大脳とをあげている。「人間はその大脳によって無限の力を与えられ、個々の発明を調和させる全体的な努力によって、この力を使用することを学んだ」のである。言語を発明したのも、道具を発明したのも、すべて大脳の発達の結果だといっているのである。

大脳は無数のノイロンより成っているが、それが正常に働くためには、一定の内部環境が必要である。そして、内部環境に重要な変化が起こり、個体の平衡が失われた時、大脳は警戒の信号を発する。さまざまな欲求がそれであって、この信号に敏感に反応し、個体の平衡の回復を目ざして行動を起こすのが本能である。

これらさまざまな欲求のなかで、人間にとって基本的な欲求は、飢えと渇き、性的欲求、それに社会的欲求だと、シヨシャルは述べている。飢えと渇き、性的欲求にならべて社会的欲求をあげたことは、シヨシャルの卓見である。彼は、『動物の社会・人間の社会』（一九五五年 吉倉範光訳 文庫ケセジ）のなかでこの社会的欲求について、次のように記している。

「……この欲求は社会的欲求（ウィーラ Wheeler）とよばれ、神経系統の状態にもとづき、社会から離れているとほかの同類を求め、不安を示すようになる。猿によく見られるものである。これは性本能とはちがうが、それに近い本能による社会誘引作用である。（性本能は生来性の神経中枢の状態で、欲求を満足しようと

一方、同化作用とは、摂取した外界の物質を分解して、エネルギーを解放させるのと反対に、外界の物質の分子を「自分に似たものにして自分に合体させる」合成的な化学的活動である。それは、個体としての生命を形成する作用と、個体としての生命を増殖する作用、すなわち生殖作用のうちに顕著に認められる。

ところで、代謝が生命に特有のものであるということは、代謝がなくては生命を維持することができないからである。いや、たんに生命を維持するという受動的な、保守的な作用を代謝が果たしている、と考えるのは的確とはいえない。なぜならすでにみえたとおり、生命はコロイド状の、たえず変化する流動体であって、固定した静止状態のものではないからである。代謝は、このような生命の流動的な活動を支え、促進している、というよりは、この流動的な活動そのものの一環として位置づけられる、と考えるべきであらう。

「結局、生命は物質というより活動として現われている」とは、シヨシャルのべつの著書『死』（一九六〇年 江上・三浦共訳 文庫ケセジ）のなかの言葉だが、この認識は大切である。代謝はそれ自体が活動であり、生命という物質を動かすための手段、生命という物質を載せてある目的地まで運ぶ運搬車ではない。それ自体が生命という物質の活動の一環である。生命と名づけられた車の、いわば「内燃機関」であり、それによってこの車の構造や型や機能も確定してくるような中枢作用なのである。

生命は、この外界との交換活動、すなわち代謝によって存在するのだが、物質の交換が個体と個体をめぐる環境全体との間で行なわれるゆえに、どのような物質を摂取するか、という選択や、交換すべき外界の物質の供給の過剰とか欠乏という問題が次に起こってくるのである。」

この考えは、クロボトキンの相互扶助原理を思い起こさせる。シヨシャルは、クロボトキンについて、どこにも触れていないが、いま引用した『動物の社会・人間の社会』は、『相互扶助論』と思想的基盤を共有しているといつて差し支えない。

もし社会的欲求が、飢えと渇きや性的欲求とならんで、人間の基本的な欲求であるとすれば、おそらくこれまでの社会通念や、知らず知らずのうちにそれを下敷きとしている人間論は、大幅に修正されなくてはならないだろう。すこし先走りになるが、いま問題としている労働についても、この社会的欲求を考慮にいれるか、いれないかで、およそ異った結論が得られるであらう。

このことについては、やがて触れることとなるが、そのまえに、飢えと渇きの欲求がどのようにして生じ、どのような反応を呼び起こすか、を追求しなくてはならない。

人間の欲求とは、内部環境に重大な変化が生じ、個体の平衡が失われた際に大脳が発する警戒信号であることは、すでに述べたとおりだが、飢えや渇きの場合、どのような変化が内部環境に生じ、それがどのような経路をたどって欲求となり、どのような行動を促すのであろうか。

それについてシヨシャルは、次のように述べている。すなわち、内部環境の変化についていうなら、飢えの場合は、人間のエネルギー生産に不可欠の血液中の糖分の減少であり、渇きの場合は、血液の濃度の上昇である。水の欲求である渇きが飢え以上に時間的

に耐えられないのは、水分は皮膚や肺による呼吸作用に際して、たえず失われていくからである。この変化が自律神経系統を通じてその中枢部である視床下部に伝えられ、そこでの変動が大脑皮質によって意識される時、飢えや渇きの欲求が生じるのである。

このシヨシャルの説が大筋において、現代の生理学の定説であることは、まず確かである。「飢えの感じを決定する機序を総合的に示すことが現在できるかといえは、答は明らかに否定的である。この基本的な本能の機構はまだ明らかではないのである」と慎重な態度を示している『飢え』（一九五六年 新保外志訳 文庫ケセジユ）の著者ルネ・マセイエフも、「視床下部が飢えの生理の中で重要な役割を演ずるといふことも確実らしい」として、胃の収縮運動のうちに飢えの原因を認める通念を否定している。飢えはもっと複雑で総合的なメカニズムによって生じるのである。

もっとも、マセイエフは、シヨシャルが主張している、血糖値の減少を飢えの本質的な原因とする説は、内分泌学の研究によって否定されたとし、J・マイヤーらの細胞の糖代謝を飢えの指標とする説を支持しているようである。マイヤーによれば、細胞の糖代謝が活潑な時は飢えはおこらぬが、それが停滞し、弱まってくると、視床下部の飢えの中枢を刺激し、飢えの欲求を生じさせる、というのである。

これらの専門的な領域になってくると、いずれの仮説が妥当であるか、判断することはばくには困難である。それについては、生理学者の専門的研究の進歩を待つよりほかない。しかし、大筋として、飢えが、内部環境の変化により失われた個体の平衡を取りもどすべく発せられた信号である、という定義については、これを定説

る、という点である。この行動がさらに発展して労働となるのだが、この点に着目して考えるなら、労働の究極の目的は、内部環境の平衡の再建にあり、飢えや渇きという欲求の充足ではない、と言

いえるだろう。これは一見、詭弁のようにみえるかもしれない。欲求が充足されれば、内部環境の平衡は再建されるのだから、欲求の充足と内部環境の平衡の再建は同義語ではないか、と受け取られるかもしれないが、じつはそうではないのである。これが動物であれば、この両者を等号で結びつけることは可能である。動物は、空腹になれば食べはじめ、満腹になると自動的に食べるのを止める。ところが、人間は、このような生理の自動性を失っている。シヨシャルが指摘しているように、「人間は飢えていないのに食べ、渇きなしに飲むことに慣れていて、料理の主要な目的はまさしく満腹によって食事を止めるのを妨げることにある」（『人間の生物学』という具合）である。欲求の充足が、このように人工の空間に限りなく拡張されるとすれば、そのこと自体が内部環境の平衡の再建ではなく、破壊につながることは見易い道理である。

人間だけが生理の自動性——単純な自家調節作用から縁遠くなった理由は、おそらく大脳の発達により作りだされた人工の空間、絵の空間、もう一ついえば想像力の空間を、自然の空間、地の空間、もう一ついえば物質の空間と並んで創造したからであろう。人工の空間を形成するのにもっとも寄与したのは、言語作用であろう。言語を通じて、人間は他の動物を抜いて最高の進化を遂げることができたが、同時に、言語などの人工の膜で自然の空間を覆ってしまい、自然の刺激にストレートに反応する能力を後退させていったのであ

とみて差支えないだろう。「この点において、睡眠、呼吸あるいは情緒などと同じように飢えは生体平衡機序の一部をなしている。目的論的な言い方をすれば、生物体のエネルギー及び各種構成物質の、出入りの平衡を維持する任務をおびているといえよう」とマセイエフは言い、「飢餓と渇きは、内部環境が変化したために視床下部の段階に生じた変動が大脑皮質によって意識されたものであり、またこれらの変化は意識されなくても反射路により、内部環境の平衡の再建を目的とした行動を十分作り出すことができる」とシヨシャルは述べている。

この信号に鋭敏に反応して、本能の行動が開始される。食欲の行動がそれである。つまり、なにかを食べたり、飲んだりすることによって、内部環境の失われた平衡を再建するのだ。だが、それだけではない。食欲の行動は、食物に対する感受性を細胞に喚起させる。その結果、外界にある食物ないしは食物になりうる物質は、この感受性を刺激し、細胞は興奮して活動を開始する。たとえば狩猟のような捕食行動がそれである。ここに人間の労働の芽がみられる。

さて、これまでかなり綿密に、労働の芽が現われるまでの過程を、おもにシヨシャルによりながら、人間の生理に即して語ってきた。そのなかで明らかになったとおり、飢えや渇きは、人間が食物を得るべく外界に働きかける行動の主要な指標をなしている。そのかぎりでは、「飢え」を労働の動機とみる社会通念は、かならずしも誤っているとはいえないだろう。

しかし、ここで注意しなくてはならぬのは、飢えや渇きは、もと

も人間の内部環境の変化を大脳に伝える信号でしかなく、この信号を受けて、内部環境の平衡を再建しようとする行動が始められる。それゆえ、労働の動機を「飢え」としてとらえることは、一見妥当のようにみえて、じつは意外な落とし穴にはまり込む結果となる。それは、空気を罐詰にして売出すという、惨憺たる現代がなによりも雄弁に物語っているところである。もし労働が飢えや渇きの欲求の充足のために営まれるものではなく、「内部環境の平衡の再建のための欲求の充足」を旨とするものとして社会通念化されていたならば、地球をあげての環境破壊に甚大な量の労働が投入されるというような悲劇は起こらずにすんだにちがいない。

けれども、労働の本質を「内部環境の平衡の再建のため」という限定づきの欲求の充足に求めるだけでは十分でない。飢えの原因を胃の収縮運動に求める通念が、単純にすぎて誤りであるように、労働の本質を、限定づきにせよ、飢えと渇きの欲求の充足だけに求めることは、単純にすぎるからである。

ま先に述べたように、シヨシャルは、人間の基本的欲求として、飢えと渇きのほか、性的欲求と社会的欲求とをあげている。この二つの基本的欲求が、労働の本質に係わることがないか、どうか、考えてみなくてはならない。

フロイト派のように、すべての行動を性的欲求によって説明するならば、当然、労働も、性的欲求と係わってくるだろう。また、大熊信行が主張しているように、生殖を人間生命の生産としてとらえるなら、生殖を直接の目的とする性的欲求は、その意味での「生産労働」の本質ということになる。「女に飢える」という言い方にみえるように、性的欲求も、一種の飢餓感にはかならない。

しかし、性的欲求が直接求めるのは、異性もしくは同性としての

個体であり、それ以外ではない。性的欲求の充足のために起こされる行動は、性的な接触や結合——広い意味での婚姻である。外界に働きかけて、必要な物質を獲得し、あるいは生産する行動とは異つたレベルのものといわなくてはならない。

一方、社会的欲求はどうだろうか。社会的欲求と性的欲求との展開は、生理学的にみると、まったく違った経路をたどっている。すなわち、性的欲求は、「ノイロンに対する性ホルモンにもとづき、種の繁殖を目ざして（同性へかたむく異常の場合は別として）異性の個人を求め、それに結びつく」（シヨシャル『道徳と生理』一九六一年吉岡修一郎訳文庫クセジュ）ものである。それに対して、社会的欲求は、「各個体は他の個体を必要とする」（『人間の生物学』という基本的な事実に基づいている。この事実は、「社会的喚起因に対する感受性を持たせ、隔離された個体に仲間を探す必要を感じさせる」のである。「われわれはそれゆえ基本的な社会的事実である社会を渴望する本能の下にある。社会的生物は生れつき他の個体の存在なしにはその平衡を維持することができない」と、つづけてシヨシャルは述べている。

シヨシャルはまたべつつとところで、「社会的愛着（シヨシャルは社会的欲求と同義に用いている——筆者注）は、恒久的欲求で、はっきりした機能目的はなく、ただぼんやりと他を求め、生命を保つあらゆる行為を共同で行おうという要求があるだけである」（『動物の社会・人間の社会』）と記しているが、このことからうかがえるように、社会的欲求は、飢えや渇き、あるいは性的欲求に比べて、一見つかまえない、拡散されたものということができよう。飢えや渇きには食物や水というはっきりした捕獲の対象があり、性的

欲求には異性（場合によっては同性）との性的結合という明確な目標がある。ところが、社会的欲求には、それほど判然とした対象や目標はない。不特定の個体と任意に仲間でありたい、仲間なしには生きていけないから仲間を求める、というすこぶる漠然としたものしかないのである。

それは、すこぶる漠然としたものであるゆえに、性的欲求とも重り合うようにみられよう。たとえば、「肌を触れ合う」とか「肌を温め合う」という言葉で表現されている個体と個体との接触欲求あるいは愛着欲求は、性的欲求にも社会的欲求にもみることができ。相違は、性的欲求の場合は、接触欲求の対象が特定の異性（場合によっては同性）もしくは親と子など、いわば生物的特性が接触の契機となっているのに対して、社会的欲求の場合は、地理的や社会的環境のような非生物的特性を契機としていることであろう。

このことは、社会的欲求の起源からして、きわめて当然といわねばならない。なぜなら社会的欲求は、人間の場合でいえば、六十年に及ぶ長い群居生活のなかで次第に喚起され、開発され、機構化されていったものだからである。

もしそうだとすれば、社会的欲求は、労働の本質に深い係わりをもっている、ということができよう。なぜなら、だれもが知っているように、労働は、ほとんどの場合、何人かの人間による共同の営み、つまり社会的労働だからである。

ここで、労働の成立について、一つの仮説を考えてみよう。一方に、「内部環境の平衡の再建のために」飢えや渇きがあり、他方、ほぼ時を同じくして、やはり「内部環境の平衡の再建のために」社会的欲求があるとしよう。飢えや渇きは、外界の食物や水を求め、

あるいはそれらを生産することを要求している。一方、社会的欲求は、漠然と「肌を温め合う」仲間を求めている。とすれば、この両方の要求が、労働に結合されるのは、自然の成行きであろう。労働が共同労働、社会的労働であるのは、たんに技術的、経済的必要性を契機とするものではない。もとよりそれらの契機も内包されているだろうが、より本質的には、社会的必要——社会的欲求に根ざしている、というべきなのである。

このように、労働は、飢えと渇きの欲求の充足だけをその本質とするような単純なものではなく、社会的欲求の充足をも加えた複合的な営みであるが、さらに、生命活動に固有な特性の一つであるリズム性と、外界を対象化する意識の二つを加えることで、その本質的指標は、すべて出揃うことになる。

生命が、コロイド状態をなしており、たえず変化し、流動していることはさきに述べたところだが、この一見、ばらばらにみえる変化、流動をよく観察すると、そこにはかならず一定の波、つまり活潑な活動期と休息期とがみられる。そして、そのうちのあるものは、この活動期と休息期を周期的に繰り返し、一種のリズムを構成している。身近なところでは、覚醒と睡眠、女性の月経、あるいは心臓の鼓動、呼吸作用などがあり、また、毎年春になると花をつけ、秋になると実を結ぶある種の植物にも、リズムをみることができ。

この生命にみられるリズムが、外部環境、つまり自然にみられるリズムに影響されていることは、最近の研究からも明らかになようである。地球の自転にもなつて、自然には春夏秋冬の季節のリズム、昼と夜のリズム、潮の干満のリズム等々、多くの周期的な線り

返しが見られる。なかでも、昼と夜のリズムは、光の照射の変化や温度の変化などをともなうところから、個体の生命のリズムを生み出す主因とみなされている。

個体の生命のリズムで基本となるのは、昼と夜のリズムに対応して営まれる覚醒と睡眠のリズムであり、これが、日周期性のリズム、つまり二十四時間を通じて規則的に繰り返されるリズムのすべてをコントロールし、いわばリズムの「鍵」といわれている。睡眠を断つた場合の方が、食物や水を断つた場合よりもずっと短期間で死に至ることを考えれば、人間の行動のなかで、このリズムが占めている位置の大きさが自ら理解できよう。

ところで、人間が外界から食物や水を求め、またそれらを生産する行動を始める時、いま述べてきた自然のリズムと生命のリズムは、二重の意味でこの行動に係わってくる。というより、このリズムに対応することなく、この行動はそもそも成り立たないのである。

古代中国の書物『詩経』に「日出でて作り、日入りてやすむ。井を掘りて飲み、田を耕して食う。帝力我に何かあらんや」という有名な詩がある。きわめて早い時期の労働讃歌ともいふべきこの詩を讀んでも分かるとおり、労働は、最初から昼と夜のリズムに忠じて営まれていた。その逆では、仕事にならぬという単純な理由からである。採集、狩猟の労働にせよ、農業の労働にせよ、自然のリズムに順応せずに行なうことは、およそ考えられぬことであつたといわねばならない。一定の周期をもつ植物を栽培するには、その植物の周期に順応しなくてはならない。そうでなくては、植物は育たぬからである。

こうした自然のリズムへの順応は、必然的に労働の本質それ自体をリズムカルなものにしていくが、労働のリズム性を生み出すのは、自然のリズムだけではない。個体の生命のリズムもまた、労働に係わっている。

労働、とくに人類の最初の労働が、ほとんど肉体、なかでも筋を使用して行なわれていたことは明らかである。筋は、心臓のように昼夜の別なく一つのリズムにしがたつて活動するものではなく、大脳の指示にもとづいて随意に収縮する性質をもっている。したがって、場合によるとそれはかなりひどい過常活動をしられ、筋の過常活動は同時に筋を支配する中枢神経系にも過常活動を強要する。その結果、筋神経系や筋に中毒症状が現われる。いわゆる疲労がそれであり、筋の活動は停滞し、効率も低下する。

したがって、疲労が生じないようにするためには、筋に休息期間を与える必要がある。活動する期間と休息する期間の組み合わせを作り、それを繰り返すことによつて、筋は長時間にわたつて疲労せず、効率をあげることができるばかりか、それが他の身体活動のリズムと合致する場合には、一種の快感さえ生ずるのである。

このように、リズム性は労働にとつて不可欠であり、その本質の一つをなしているのだが、そのことは、労働に際して歌われる作業歌によつても傍証できる。ドイツの経済史家カール・ビュヒャーの『労働とリズム』（一八九六年）は、古代から現代まで、世界各地にみられる作業歌を収集、分析し、労働におけるリズムのもつ意義を究明した先駆的な業績だが、「経済的發展原則としてのリズム」と題される最後の章で、ビュヒャーは次のように述べている。

「しかし、道具を使用すると同時に堅い、強く振り廻される材料

からリズムカルに流れ、従つて音楽的な作用をもつ労働音が生じ、それが快感を起させる結果、原始的な人間に拍車をかける作用をもち、彼をしてそれを繰り返したり強めたりするように努力させる。かくして道具の響にそれを模倣する人間の声が変わり、——作業歌が生れるのである。」（高山洋吉訳による 以下同じ）

こうして生まれた作業歌は、こんどは逆にそれを歌うことによつて労働のリズムを調律し、その効率を促進する働きを演ずる。

さらに、ビュヒャーは労働とダンスの関係をあげている。バルンディ人という未開民族の間には「労働はダンスである」という言葉があり、事実、彼らの間では、労働とダンスはいずれもきわめてリズムカルに行なわれ、その区別をつけるのがむずかしい、といわれている。

「労働が律動的に形成される限り、それはダンスと種類を異にするものではなくて、程度を異にするに過ぎないものである。そしてこれら両者はまた労働におけると同じくダンスにおいても活動そのものの外に横たわっている成果、——仲間を楽しませたり、驚嘆させたりする等のが目指されている点でも似ているのである。最後に、自然民族の多衆ダンスがもっているといわれている『社会化的作用』は、断然、彼等の多衆労働にも認められねばならぬ。」

こう語るビュヒャーは、もう一步突込んで「吾々の研究は幾度か吾々を、人類の発達初期においては労働と遊戯とは相互に区別されなかつたという事実に向面させた」と述べ、問題の核心に迫っている。

しかし、この問題は、「2 未開社会の労働」（次号掲載）で追求することとし、労働の本質を成す最後の指標、すなわち、外界を対象化する意識に移りたい。

労働を、「人間が対自的になること」としてとらえたのは、「序論 1 マルクスにおける労働の概念」で述べたとおり、マルクスである。マルクスの主張については、その項でかなり詳しく敷衍しておいたから、改めて述べるまでもないだろうが、簡単に要約しておけば、マルクスが人間の労働の本質とみなしているのは、この対象化の意識である。飢えや渇きの欲求についていえば、それは、本質としてではなく、むしろ外界を対象化する意識を生み出す動機として位置づけられている、といった方が的確であろう。「内部環境の平衡の再建」という認識はほとんどみられない。社会的欲求についても、それを人間の、あるいは生物の基本的欲求として認識した形跡はない。マルクスが強調する「類的本質存在」としての人間は、社会的欲求に基づいて形成されたのではなく、対象化の意識を媒介として形成されたとされている。リズム性に関しても、マルクスが問題とした形跡はない。

ところで、対象化の意識とはなんだろうか。また、それはどのようにして労働に係わるのだろうか。そのことを、マルクスの文脈を離れ、ショシャルの文脈のなかに考えてみよう。

ショシャルが、人間の生命には、細胞の生命、個体の生命、理性の生命の三つがある、としたことはすでに述べたとおりだが、最後の理性の生命こそ、意識にはかならない。「最後に人間は、意識と呼ばれている、この肉体の生命（個体の生命と同義——筆者注）よ

りつと重要な理性の生命を持ち、自由にかつ欲するように行動す

ることができる」と、彼は書いている。

しかし、ここで見失つてならないのは、理性の生命は、肉体の生命の「最も重要な結果」にはちがいないが、それ自体で、他と別個に存続するものでは決してなく、「生体の生命や細胞の生命に基づいている」ということである。理性の生命が生ずるのは大脳なのであるが、大脳は、その他の身体の各器官の一環であり、これらの各器官は、もちろん大脳を含めて数百億という細胞より成っている。そして大脳が正常に働くためには、これらの器官より成る内部環境の平衡が不可欠である。この基本的な事実を見失うと、意識が作りだした人工の空間、絵の空間、もう一ついえば想像力の空間が一人立ちし、先に述べたような欲求の倒錯が作りだされる。

もともと、「意識のあけぼのは生命と共に現れるが、それがわれわれの意識に似たものになるのは、神経系統が十分に発達した中枢（つまり大脳——筆者注）をもち、それによつて、存在や世界の認識の基礎を供給するに足るような感覚運動的な統合ができるようになったとき」（ショシャル『意識の生理学』一九四八年 吉岡修一郎訳 文庫クセジュ）にかざられている。この感覚運動的統合とは、言いかえれば神経の転輸、つまり無数の感覚的な刺激の流入を、行動を指示するノイロンへと次々に転輸する、切り換える作用のことである。この神経の転輸の数がふえればふえるほど、感覚的な刺激に対する反応は直接的でなく、いくつものクッションを間におく間接的なものとなり、外界に対する自律性がつよまってくる。神経の転輸の数がふえるということは、それだけ大脳のノイロンの数がふえるということであり、それには大脳の容器である大きな頭蓋が必要だったのである。

このようにして発達した意識は、自分の行動を自分自身から切り離し、対象としてみるようになる。反省がそれである。シヨシャルによれば、「反省とは、意識の発達の第三段階であり、人類固有の段階であるところの、そして大脳のより高度の複雑さに基づくところの警戒と注意」「意識の生理学」である。反省という言葉は、倫理的な臭味がつよく、適切な訳語とはおもえないが、その意味内容からすれば、対象化の意識とはほぼ重り合っている。

シヨシャルは、この反省とならんで社会的記憶、言語化(象徴化あるいは観念化)、抽象化などを、人間の意識の特性として列挙している。これらの特性の因果関係や相互関係については、今日の学問の水準では十分に解明されていないようだが、これらの特性が労働の形成にふかく係わっていることはいうまでもないだろう。なかでも、人間が外界に働きかけて、必要な物質を獲得し、あるいは生産する行動を行なう場合、一方で、その外界を対象化する意識が発達しつつあったとすれば、それが結びつくのは、他の場合とおなじく、きわめて自然である。とくに、必要な物質を人間の手で生産するには、対象化の意識は不可欠といわねばならない。

その意味で、人間労働にとって対象化の意識はその本質をなしているといえるだろうが、しかし、それだからといって、他の諸指標がすべてこの対象化の意識のなかに「揚棄」されてしまったとは言えない。他の諸指標——飢えと渇き、社会的欲求、リズム性が対象化の意識に吸収され、廃棄されてしまったわけではない。そうではなくて、それらが重層してはじめて労働という営みが作りだされるのである。この重層化は、生命が変化し、流動するものであるゆえに、平面的な積み重ねという形態にはなりえない。強いて図形化し

ていえば、螺旋状の重層ということになる。それは、単線式に段階を追って発展していくのではなく、進化する生命と、それに対応して退化する生命とのきわめて複雑なドラマなのである。先に述べた、「飢えていないのに食べ、渇きなしに飲むことに慣れ」た人間の欲求の「進化」と、それに見合って、自然の刺激にストレートに反応する能力の退化という現象は、その一例である。

それゆえに、飢えと渇き、社会的欲求、リズム性、対象化の意識——この四つ指標の螺旋状の重層が、労働のなかで平衡を維持している時、労働はそのまま望ましい条件におかれている、ということになる。この平衡がどこかで破られると、労働は、それ自体の発展をねじまげられ、畸型化されるのである。

■ 投稿の規程

自分自身のなかからしぼりだしたエキスでつづられた文章、自分の声がそこに響いている作品、われわれはそういった投稿を待っている。テーマ、ジャンルは限定しない。

■ しめきり日／とくに設けない。

■ 枚数／とくに限定しない。ただし四百字詰百枚以内がのぞましい。五十枚以上の場合は連載になることがある。

■ 原稿料／なし。掲載号を五部贈呈する。

■ 原則として原稿は返却しない。返却を希望される場合は返信料を同封されたい。

■ 原稿の取捨は編集者の判定による。

■ 送り先／東京都新宿区北山伏町三三(大沢方) 黒の手帖社